

## 防災歳時記 (44)

# —虎が雨—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮 澤 清 治

### 虎が雨

「虎が雨」ということばがある。旧暦5月28日(今の暦で6月下旬から7月中旬ごろに当たる)に降る雨をいう。

1193年(建久4)年5月28日、源頼朝が富士のすそ野で巻き狩りをしたとき、頼朝のお供をした工藤祐経が宿にもどり、酒を酌み交わしていた。夜半近く、外は激しい雷雨となった。それを待っていたかのように、曾我兄弟は部屋に乱入し、祐経を殺害し父のあだ討ちを果たした。このとき21歳の十郎祐成は討ち死にし、19歳の五郎も取り調べられたのち、首をはねられてしまう。

これを聞いた十郎の愛人の虎御前はひどく悲しみ、泣きはらした。そのときから人々は、旧暦5月28日に降る雨を、虎御前が泣く涙であると伝え、「虎が雨」と呼ぶようになった。「虎が雨」は俳句歳時記で夏の季語。

虎御前は「大磯の虎」といわれ、寅年、寅の月、寅の日に生まれたので、父の付けた名が三寅御前。たいへん美しく父の死後、遊女の娘として育てられ、十郎に出会った。

植物・民俗学者の南方熊楠(1867~1941)は、虎を名前にした日本人の代表に、男は加藤虎之助(清正)を、女は大磯の虎女を挙げる。いまでも俳句の歳時記など残っているほどだから、大した女性である。

「信州善光寺の歴史(小林計一郎著)」に、次のような悲話を書いてある(写真1)。

「十郎の愛人、虎御前が十郎のおとむらいをするために尼になって善光寺に来ました。虎御前はこのときまだ19歳で、虎の出家を聞いた人がみんな涙を流したと、吾妻鏡という本に書いてあります。長野市の岩石町に、虎が石、という石があつて虎御前をまつた墓だといわれますが、虎の墓はほかにもたくさんあつて本当かどうかよくわかりません」。



写真1 信州善光寺

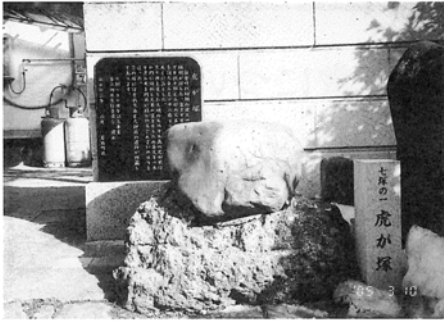


写真2 虎が塚（長野市岩石町）

虎が塚、(写真2)の碑銘に「兄十郎を愛した大磯の名妓19歳の虎御前は仏門に帰依し兄弟の霊を弔うため善光寺へ来て虎石庵を門前に結び供養さんまいの日々を送った。この塚には曾我兄弟と虎御前の遺物が埋蔵してあります。」とある。

## 傘まつり

曾我兄弟の遺跡とされる地は、小田原市のほか、東北地方から九州まできわめて多く、あだ討ちの故事にならんだ行事も多い。

神奈川県小田原市曾我谷津の城前寺では今の暦の5月28日、傘焼きまつりを行い兄弟を供養する。雨の暗夜に傘に火をつけて松明とし、工藤祐経の陣屋に討ち入った故事にちなみ、兄弟にふんした幼児が奉納された古傘を焼く。傘は今どきのこうもり傘やパラソルなどでは様にならないので、小田原の傘屋さんらが寄贈してくれる。

南の鹿児島市では、「曾我どんの傘焼き」の行事が旧暦5月28日に、甲突川の高見橋の下流の川原で行われる。夏の夜空を焦がす火の祭典である。使い古しの和傘を威勢

よく燃やしながら、その周りをふんどし一つの少年たちが曾我兄弟の歌を高らかに踊るもので、鹿児島市に古くから伝わる三大行事の一つ。

旧暦5月28日は、今年は6月23日である。このころは梅雨の真っ最中で、雷を伴った大雨が降りやすい。洪水や土砂災害に最も注意を要する時期である。高温多湿の季節で、細菌やカビなども繁殖しやすい。

元気象庁予報官の佐藤忠夫さんが、東京で1年のうちで最も雨が降りやすい日は6月28日だと、過去120年間の膨大なデータから割り出した。佐藤さんによれば、1881年から2000年までの120年間で、東京で最も雨が降りやすい日は、6月26日と6月28日で雨天率はいずれも51.7%、次いで降りやすい日は9月15日の50.0%。前者は梅雨本番、後者は秋の長雨の時期に当たる。

月遅れの「虎が雨」の日(6月28日)が、雨の特異日とは虎御前が現世まで涙を流しているせいだろうか。

ちなみに、東京で1年のうちで最も晴れやすい日(晴れの特異日)は、冬晴れの1月6日(晴天率81.6%)である。

暦の上の特定の日に、ある特定の気象状態が現れる割合が前後の日に比べて高い日のことを特異日という。特異日が現れる気象学的原因は明らかではない。